

資料(2)

八太舟三「現下の問題」(昭和七年1932一月十日発行『自聯新聞』第66号)

—第一項は無関係につき省略—

二、

今や吾々は更に深く且つ、広く社会機構中に入り込み、民衆と結びつかねばならぬ。それがためには我々は民衆運動、民衆と結びつく運動の形態を採らねばならない。私はこれを痛切に感ずる。アナキストが力を得るためには大衆の中に這入り込むべきである。大衆の中に這入り込むには、大衆の生活の中へ這入る運動の形態を採るのが現下では最も必要である。

今は資本主義の時代である。電車に乗るにも金が要る。一切は皆商的行为である。民衆は皆商行為をしている。故に我々も商的行为を通じて民衆の中に這り込むべきである。

今一つは隣近所の人々、即ち町内に保安組合を作るべきである(注40)。保安組合は地域的に民衆が合体して民衆の利益保存と保安とを計る民衆運動である。今、その一例を挙げれば、岐阜地方の農村に行われている輪中のごときである。これは或る地域内の農民が組合を設けて、その組合内の利害問題一切を取り扱い、紛争等のごときも裁判所へは持ち出さずに輪中で解決をする。小作問題は勿論、保安(警察力)までも輪中で行なつて、巡査は形式的に存在するに過ぎない。

(注40)保安組合なる名称は「如何に為すべきか」の第三章の(3)に出ている。傍点筆者。我々は先ず斯かる問題から出発をして、そこに力を得て行かねばならぬ。

三、

日本は狭い国だ。四面海で、イタリイからフランスへ山越して行けるのとは事情が違ふ。暴力といつても柔道や剣道ではしょうがない。アメリカではギャングは機関銃をもっているが日本ではピストルより所持できぬ。この国のこの有様では何をやっても共産党のごとく、精鋭分子を失うばかりで、何等の實力をも得られない。私は今や民衆運動へ向つて行くような外、この国では力は得られないと思う。

資料(3)

農青社「如何に為すべきか」(昭和六年1931七月発行)

序

農村の窮乏は今ドン底にある。この事実の前に多言は無駄だ。現実の問題は余りにも切迫している。吾々は今「如何になすべきか」一、民衆との結合

農村の窮乏は刻一刻惨状を辿りつつある。各地の同志は現状の如何に急迫しているかを痛感し、これに対する俺達の態度、その実態化について引切り無しに論じている。過去に於ける農村運動が偶々、理論と實際との遊離を来し、それ故、村民衆との離反を招き、俺達の運動は結社の、党派的に固着し、俺達が欲すると否とにかかわらず、総ての村の事象の前に恰も対岸の火事の立場に立つより外はなかった。即ち茲に俺達の生命とする民衆運動の立場は失われ、手も足も出ないのだ。

然らば、吾々は今屋上屋をかさね、理論的理論の検討低徊を排しもつと根本的直接的な問題を解決せねばならぬのだ。俺達の態度

俺達はこれまで来たるべき革命を成就するには、暴動が起つてきたら、そのとき起つて渦中に投じ、その暴動の先頭に立つて戦い、それをアナキスト革命へ持つて行くんだと考えがちであつた。それは都合のいい英雄主義的な空想であつた。

暴動のよつて起きるところの原因は何であるか。それは現実生活の行詰りから、その不平不満の鬱積が衝動的に爆発するにすぎない。かくのごとき単なるウチ壊し(器物破壊)では駄目だ。社会組織の徹底的破壊でなければ解決は絶体には出来ない。俺達は偶々その暴風の行動の故に幻惑されてはならない。過去一切の革命——フランスや、ロシアや、ドイツや、最近行われたスペイン革命に至る、その一切の革命——が、遂にアナキスト革命とならなかつた理由は衝動的であつて、意識的でない暴動自身の性質のバクローに他ならない。それは建設的破壊でなく、破壊的破壊であり感情的であり、決して明確な社会理想を有つてはいない。恐らく、今日、このままで推移するこの民衆暴動のこの虚に乗じて、吾国に於ては国粹主義の反革命、共産党の赤色反革命によって乗つとられることは確実であろう(注41)。

(注41)この(注)は原文にはない。農青運動史執筆にあたつてつけ加えられたものである。当時における各国共産党は、当然コミンテルンの一支部で、コミンテルンの規約、たとえば独裁、武装手段などの実行を加盟条件として承認しなければならぬ。しかし、共産党は本質的には民衆暴動は核心ではないと考えるのが正しい。かれらの遣り口を注視することが必要である。スベ

インに於てかれらはどうかと言え、地主とか中産階級とかをスペイン共産党に組織し、人民戦線の内閣にソ連コミンテルンから武器を供与する代償として、人民戦線内閣の内相、警察総監、軍部の政治局員を党員で占有することを要求する。それから凡ての反対勢力、特にアナキストとかアナルコ・サンジカリストを、反革命という名目で裁判なしに殺してしまふことによって、ポルシェウイキ政権を確立するのが、きわめて常習的な遣り方である。このようなパターンは充分に知悉すべきだ。

これを以てこれを見れば、今日における俺達の一手一投足は、近きその日に於ける成功失敗の根本的原因となる最も重大なる時期に際会しているものと信ずる。

しかしながら、飄つて思うに、来るべき革命は思想の拡充にあるとは言いがた、単なる思想人がふえ、いわゆる存在のアナキストが各村にいようと、単に彼が村にいたというだけでは何ともならないのだ。

俺達がつねに主張している全村運動の主張は、行動の主語であり、民衆との結合であり、民衆運動が黒旗のもとに意識的に動向せんとする主張である。具体的に解放へ進発せんとする農村青年の態度である。

二、全村運動の準備

上からする一切の運動を排せ！而して、その中からすること（高踏的指導的な教化主義では駄目だ）従って全村的に湧き立つてくるところの全村民衆運動でなくては駄目だ。

1 消極より積極へ

俺達はこれまで余り理屈を考えすぎた。ああすればああなる、こうすればこうなる。そして未だ何もやっても見もしないうちから矢たらに考えばかり先にして、単に頭の中ですっかり実行してしまっている。或は警察を恐れ、或はひとえにたかをくくって（例えば青年会に対してそれは反動だから駄目だなど）おさまっている間は、そこで何んにも俺達の動きがありはしないし、一寸も何事も解決されはしない。

自分独りが、幾らやったって駄目だと考えて、一寸も動こうとしないのだ。それは消極的、しりごみである。それは絶対に俺達の禁物だ。解放の邪魔だ、退嬰主義を打ちこわせ！俺達はもっと地道に実行にかかれるでないか。当って砕けるだ！これ解放運動の第一の考えである。

2 村青年会を目指せ

俺達が村の主動力として動くために、全村運動を具体的に起こすためにはどうしても俺たちの仲間をふやさねばならぬ。それは村に於ては非常に困難であろう。けれども若し俺達が真に解放を望み、何事かを為そうとする意志に燃えるなら、必ず出来る。

然らば俺達は俺達の友の一人に話しかけ、或は同志的に結合する、更らに俺達は村の青年会が、いわゆる反動青年団だからと高をく

くっていないで先ずその中に入ることだ。そしてその青年団で何がなされ、何をしようとしているか、そしてその時々々の問題の是非を忌憚なくバクロし、遂に青年会の動向をして吾々の主張に合流せしめよ。吾々の現実における刻下の重大問題だ。ともすれば閑却されがちな青年会こそは、却って農村運動の殆ど唯一の足がかりだ。（注42）

（注42）農青運動は、村マルクス青年はエリート性が強く、同調したいという判断から、マルクス青年への関心は少なかつた。但し、長野県下では真面目な人達は吸収した。次に、特に長野県青年会の農村青年には、吾々はつよい関心をもち、敬意を表しつづけたことを、この機会に忘却しがたいものとして記録したい。吾々は、主義青年といったレッテルをよるこんで貼っているような人達よりも、貧困だが、まじめで、村がどうやって生きて行けばよいかと苦悩している青年会の多数の人々は吾々の真の同志であつた。この（注）も原文にはない。

3 連絡

同じ村にいながら、所を異にするために俺達お互同志が知らないでいる場合が往々にある。況んや、他村の同志とは全くいかなる連絡もとられていない。さらに一地方、一県、あるいは関東、東海、関西、東北、中部、全信等々のより広大なる区域における全同志の堅い結合聯絡のごときは殆ど顧みられていない。かくのごとく、その連絡の孤独や疎遠にもとづく運動の不振は、けだし大きな禍根となつてゐるものと信ずる。然しながら、それでは、如何にして相互に連絡をつけるか、吾々としても大いにそれについて考え、もっとも便宜な方法について考えている。

連絡網の完成とともに、村、地方、県、区協同して同一態度を以て為すなら（そしてそれは必要だ）必ず更に大きな運動の進展がのぞめるであらう。

4 合法と非合法

俺達の求むるものが根本的であればあるほど危険にさらされる。俺達は線香花火であつてはならないし、また、不注意からムダな犠牲を払ふ愚を犯してはならない。俺達はいつも世間のせまい村にゐるのだ。だから何をしても実に村の人の眼につき易い。

表面に立つて公然と運動をすすめる者——後に示してある地方農民自由聯盟の中心の人々——と、この人々が迫害や投獄のために戦線から余儀なく拉し去られたあとにあって、更に運動を再建し継続して行く人は、事実的には固い盟約の同志であらうけれども、表面的には（少くとも村人の眼からは）密接な関係なきもののように振舞ふ必要がある。若し、悟られたならば、一網打尽の憂目を見る。

のみならず、更に後段に述べるように、俺達の運動が、既成権力に対して積極的闘争をいどまねばならぬとき、既に表面的存在にある者は、殆どこの役割にたずさわることは困難である。公然的存在の人々の動けないところだ。この時、陰々のうちに活動せねばならないとしたら、その人々は勿論はじめから打合わせの上、意識的に村に潜在してたその裏面的同志である。

この方法の人々をあらかじめ定めて運動をすすめることは、少くとも農村運動に於ては忘れてはならぬことであると信じる。

三、日常的諸問題への態度

言うまでもなく俺達農民は「生活者だ」。俺達の理論的戦線ではいわゆる日常的諸問題に対する態度については、いまだに議論紛々のかたちであると思う。ネゴトの類でなく、何が何んだかわからない詭弁の類でもなく、真の決定的態度は恐らく与えられていない。乃至はウヤムヤのうちに廻転し去っているがごとき形である。

しかし、遊んでいては食うことの出来ぬ俺達農民——即ち生活者としては、否が応でもこの日常的諸問題にぶつかり、そして何等かの態度をもって処理せねばならないのである。

それは一例をあげるならば、毎年秋になれば必ず起る問題であるが、年貢米の問題だ。それは勿論、地主に掠奪せられる何の理由もないことを知っている。しかし、現社会はまだアナキーではない。俺達が納めまいとすれば地主、否、その背景たる広大な権力と正面衝突せねばならぬ。問題はこの問題をどう解決するかである。

どうしても現在では、この問題は団結の力によって解決するより道がない。この団結は同志的団結であり、思想的団結であり、利害的団結ではない。それは結果からみれば100%に俺達の考えを実現できぬかもしれない。しかし、問題はいかなる意志がこの闘争の根底であるかということである。世上のいわゆる改良主義とは凡そ何等の関係もない。

1 農民組合の拒否

いわゆる農民組合は「小作料負け」だ。これは頭から地主を、すなわち土地は地主のものであると考え、これについては全然疑わない。それほど認めてしまっている。

しかし、勿論、土地は地主の物ではない。農民組合の闘争はいわゆる改良主義以外の何物でもない。たとえば、それは、かの組合運動——農村消費組合、協同組合のごとき現実的改良運動にすぎぬ。俺達は当然こうした蒙昧運動を村から叩き出さねばならぬ。それではどうすればよいのか。

2 単独行動の矛盾

小作料を払わぬということは勿論正しいことである。しかし、地主は小作料を払えと迫ってくる。そのときどうするか。俺達は地主の要求を拒絶する。然らば地主は権力に訴えるであろう。このとき、俺と地主とは正面衝突だ。俺は地主を刺す。そして警察にひかれて行く……が、問題は一寸も解決されはしない。俺は、そしてギロチンにかけられる。俺はもうこの世にいない。最早社会問題はない。(けれども時として俺達が惜しみて余りある生命を落すことも、その場の成行きに於ては敢て避けられない場合もある。)

批判。

農民組合と単独行動とは共にふたつながら社会革命には絶対にならぬ。

3 △△農民自由聯盟を起せ(名称暫定、例えば保安組合、同志会等)

「小作料は払わぬ」このとき地主の権力と相対立する。俺達は単独行動の矛盾を知り、すなわち同志相求め、茲に△△地方農民自由聯盟を起こして奴等と対抗せねばならぬ。だが、聯盟の力はまだ微弱なるため、遂に小作料を奪取されるかも知れない。しかし、これ止むを得ぬことである。俺達は無論小作料を認めるもので無い。この状況の反覆のうちに必ず来るべきいつの日にか完全この状況を一蹴するべく企てることができる。村に起ってくる一切の事象——農村を困窮に陥れ圧迫する——を振り出し、それを全村の問題化に昂揚せねばならぬ。これ即ちこの聯盟の根本的役割である。

こうした表面的公然的な団体の存在はいうまでもなく民衆運動の当然の形態である。

四、全村運動の動向

今、俺達は窮迫のどん底に苦悶している。無論、小作争議は益々その数を加えるばかりだ。困窮生活からくるこのつびきならぬ小作争議は、必ず小作側の要求貫徹となる。しかし、その最も闘争の激しい東北及び近畿の地方に於て、要求の貫徹に拘らず、却って農民の購買力は衰え、人心はすさみ、ただ農村は荒廃たる状況を呈するばかりだ。すなわち、斯くのごとき日常闘争の事実からは何の救済も行われず、かかる部分的解決に依ってでは永久に農村は解放されはしない。そうだ、問題はもっとも根本的根底的なところにある。すなわち現在社会全体の改革を求めずば、恐らく如何とも為すことは出来ない。

かかる地主对小作関係なき地方、自作農村に在っても、直接問題は対社会的根本的解決に迫られていることは自作自身の行詰まれる現状に於て明かだ。然るに農民が奴隷根性の迷蒙はついに自ら目を覆うている。すなわち農民組合は協調的となり、協同組合、消費組合の乱立のごとく完全に改良主義である。けれども如何に改良に墮して行こうとも、農民の生活は依然として困苦窮乏の事実であるときに於て、つねに一揆暴動は生起するものであるが、これ即ち従来の農民一揆の失敗であり、即ち革命という革命の失敗の跡であることが前言の通りだ。

これでは駄目だ。意識的に起こすところのもの、目標をかざして進み行くものでなければ解放はあり得ない。これ即ち次に述べんとする全村活動である。

1 村民大会を起せ

窮乏の中から「このままでは如何にも困まる。何か起るだろう、きつと起るに違いない！」この村人の声とともに村民全体の空気はややもすれば、きつと何か起るだろうことを追求しつつある。

されば税金問題も、電灯問題も、道路問題も、肥料問題も、村会の不正問題も、農会問題も、それをきっかけに、その他一切の村の

現実生活の渦中から必ず起きるだろう幾多の事件をはらんで村は今、暗雲にとざされている。俺達はこのとき、この事実の前に、何事か起こるだろうこのことを待っていないで、先ず村民大会を起こせ！

勿論このとき、警察の臨監と護衛？社会主義者共のヤジウマ、裏切者、反動、日和見のアクタモクタ共が、全ての反対する奴等が十重、二十重にこれを取り巻いて騒ぐにきまっている。だが、俺達は決して兵古垂れない。俺達は大会の決議をして完全に俺達の全村運動の主張のもとに牛耳らねばならぬ！

勿論、俺達の農民自由聯盟（注43）は、この農民大会の主動分子たることは言をまたない。

（注43）△△（地名）農民自由聯盟と言った村民の中の一部であることをわざわざ呼称するような名称は本質的に不用である。その意味で第三節三項の「△△農民自由聯盟を起こせ」も殆ど全文が抹消して差支えない。全村協議会で押し通すべきであろう。

2 △△村民協議会

右の村民大会の決議の目的貫徹実行のために常設の全村的団体を設けよ！

該協議会の主張するところは、即ち政治に対しては反政治同盟、経済的には反資本主義同盟たることは勿論だ。

■反政治運動について

議会行動の否定（村会、県会、国会）即ち選挙不参加。強権の否定（法律機関、警察、裁判所、刑務所、各政庁の否定）。反軍国主義（徴兵応募拒否、憲兵反対）。自主自治の実践（吾が村のことは村自身でやる）、自由聯合の強調（村の共同、各村の協同）。自衛団の確立（反協議会の防衛、強権に対する積極行動）。

■反資本主義運動について——否定的方面

搾取反対（税金、小作料、利子不払、借金棒引）。生産物不売（米穀、繭糸、野菜、家畜、薪炭、木材、農家生産物の売出拒否）。交換経済拒否（売買、商業の否定）。貨幣の拒否（貨幣の否定）。私有廃止（土地、家屋、山林、河川、海水の私有否定）。

■経済的直接行動について——建設的方面
財物の社会化（財産の共有）。消費主義の確立（自給自足の実行）。工業農村の確立（都市労働者の帰村による村落工業の建設）。

■文化運動について

ブルジョア文化の否定。万人の享楽生活確立。宗教否定（神社、仏閣の否定——公会所化）。新文化施設の確立（芸術、科学、一切の文化）。

五、秘密行動の必要

俺達が今、上述の行動を計画し実行するために、また、その実行を最も果敢に促進するために、是非とも必要なのは秘密行動だ。

秘密行動は常に俺達の同志的結盟によってやるのだ。俺達の一挙手一投足を、あるいは俺達の聯盟の行動を、あるいは全村的傾向をぶち壊すために官憲は一切の手段を以ってかかって来るだろう。このとき何を以てその強権に対するか。俺達の秘密行動の必要はここにあるのだ。

俺達はこれについてフランス革命直前に、フランスの村に起こったこの団体の活動を見る。「そのとき手製の檄文が木に貼りつけられた——ジャックの名のもとに、あるいは領主の納屋を焼き払うために、或はその収穫を全滅させるために、或はまた領主を処刑するために、村々の秘密団体が構成された。そして幾度もジャックに依る」という文字を書かれ短刀×××××死体を発見した。」

或はまた、ある日、二つの道の交叉点に「若し領主が賦課金を徴収しようとするならば彼は××で刺された死体であつたらう。またそれを領主に払おうとする者は、何人といえども同罪であらう！」と書きつけられた十字架が立っていた。

そして農民は内心、何にも払わない口実を見つけたことを嬉んで、憲兵隊から強制されない限り払わなくなった。引続いて村々には爾後払うべき賦課金も何もない城と土地を土地台帳とを焼き払わねばならない。人民委員会（農民自由聯盟）はこれに向かって判決を下した。等、等と記録した揭示が貼られた。——パンだ！賦課金も、税金もなくなった！というこの言葉が村々に流布された合言葉であった。万人が分り易いこの合言葉は、子供達に三日も何にも食べさせられなかった母親の心に真直に行き、未納の税金を強奪する憲兵隊から苛められる百姓の頭に真直に行く。「独占する×××××！」その店々は襲撃され、小麦の運送は止まり、かくて一揆は地方に激発した。——「入市税関を倒せ！」そして市門は焼かれ、吏員達は殺され、諸都市は金の不足から、その金を要求する中央権力に対して、自ら叛逆した。——「税金帳簿や、会計簿や、市の記録所を焼き払え！」そして反古は一七八九年七月に焼け、権力は崩壊し、領主達は海外に逃亡した。そして革命は常にその火の輪を拡張するのみであった。

俺達は秘密行動以外に強権に対する道はないであらう。と共にかかる秘密行動の頻発は即ち社会の擾乱化は当然要求されているのだ。

結 び

全村運動は実に困苦困難の道だ。けれども俺達は誓う、この困苦なる道を猛進することを。最後に諸兄のためにクロボトキン翁の言葉を贈つてこの項を終る。

「革命的動乱を最も多くし、生命と果敢とを最も多く發揮した処の党派は、行動しなければならぬ日を成就するために先頭に立って進まねばならない日には最も傾聴されるであらう。しかし、準備時代に革命的行為に依って自ら断言する勇氣を持たなかったもの、自己犠牲の感情、自分達の思想を実行に移さずにはいられない欲望——若しこの欲望があったなら、群衆が街頭に降り立たないはずと

先きにそれは行動に現われるであろう——を、各個人に各団体に鼓吹する程有力な煽動を持たなかったもの、その大衆的な旗幟と明瞭で分かり易い渴望とを外に現わすことを知らなかったもの——こうした党派は、そのプログラムの最小部分を実現するにも僅かな機会しかあたえられないであろう。それは行動の党派から突き出されるであろう。